

常磐大学人間科学研究科

研究活動ガイド

2018 年度版

この研究活動ガイドには、大学院生としての研究活動とは何か、研究を生産的に行うには何を心掛ければいいのかを知る^{みちしるべ}道標となる内容が記載されています。この研究活動ガイドを参照して、生産的で質の高い研究を実施し、また研究ライフを楽しんで下さい。

(未だカバーされていない研究領域、研究手法、解析法、あるいは工事中の内容項目もありますが、それらは利用しながら整えていく予定です。)

2018年度 人間科学研究科長 大高 泉

研究資料を集めているとき、価値ある論文や著書を探しているとき、論文を執筆しているとき、引用・参考文献を書いているとき、学会発表のスライドを作成しているとき、「どうすべきか」と迷うことがある。その時、この「研究活動ガイド」が道標となる。まずは、この研究ガイドに書かれている項目を見ておいてほしい。研究活動で迷ったときに、「確か、研究活動ガイドに何か書いてあったな」、と思い出し、その時詳しく参考にしてはどうか。今一つ。こうした類書は夥しくあるが、この「研究活動ガイド」には、もう一つの魅力がある。執筆者の先生の声と佇まいをありありと思い浮かべることができる点である。会ったことも話したこともない先生ではなく、伊東先生、砂金先生、馬場先生が書いてくれたのである。その先生方が語りかけてくれるコラムの臨場感と魅力は計り知れない。マニュアルではないコラムにこそ研究の「仕事場」を見ることができるからである。



第1部 研究活動ガイド

第一領域

第二領域

第三領域

(注意)

所属領域のみ読むのではなく、研究内容によっては他領域の内容が

参考になる場合があるので、各領域の特徴を知ると共に、

共通する心得を知るためにも、ガイド全般を理解しておくこと。

第一部 人間科学研究科における研究とそれに基づく論文の構成と注意事項

常磐大学人間科学研究科は第一領域、第二領域、第三領域から構成されています。第一部では、それぞれの領域の学術研究とそれに基づく論文の基本的な構成と注意事項を述べます。なお、同一領域でも複数の異なる研究領域が存在しますので、代表的な研究領域についてはその概略を個別に説明します。

1. 第一領域 人間の発達と適応

1-1 主な研究領域

第一領域は、心理学の中で基礎理学と呼ばれる研究領域、基礎心理学の成果や方法論を実践領域へ応用する応用研究領域、あるいは心理学以外の生命科学があります。このガイドでは心理学領域を中心に紹介します。

1-1-1 行動主義心理学

私たち生物は環境の中で生きています。生きるということは行動することです。行動は、環境との関わりをとおして常に変化します。私たちの生命活動は、まさにそのような行動の変化と言えます。行動主義は、私たちの行動と環境との関係を科学的な視点からとらえるための哲学です。その発端はアメリカの J. B. Watson ですが、現在の行動主義には、その流れを組む実在論的視点に立つ方法論的行動主義と、実用主義的視点に基づく徹底的行動主義などがあります。行動主義の心理学は、行動が環境とどのようにかかわっているのかを科学的な方法で調べて、それによって私たちの生活が豊かになるように行動の制御を試みようとしています。下記の2点の参考書は、徹底的行動主義と J. B. Watson の行動主義の視点が記されている書籍です。参考にしてください。

参考：ウィリアム・M・ボーム 著，森山哲美 訳 (2016). 『行動主義を理解する—行動・文化・進化—』二瓶社 ISBN 978-4-86108-078-4/C3011
J. B. ワトソン 著，安田一郎 訳 (2017). 『行動主義の心理学』ちとせプレス ISBN 978-4-908736-02-5/C1011

1-1-2 知覚心理学

外部の物理的な視覚刺激，聴覚刺激，味覚刺激，触覚刺激，嗅覚刺激が人間にどのような見え方，聞こえ方，その他の印象を生じさせるか，その関係性を解明しようとしています。刺激変化と人間の印象（見え方，聞こえ方，感じ方など）の変化の関係性を扱います。

参考：山本健太郎・崔原齊・三浦佳世 (2014). 視覚的触感に触覚情報が及ぼす影響
基礎心理学研究, 33, 9-18.

1-1-3 認知心理学

実験や調査時に刺激と反応（行動）の関係を問題にしますが、それは精神システム、特に知識

構造や知識に基づく思考システムのあり方を解明するためです。知識システムが刺激と反応を媒介すると考えますので、その目に見えない構造やプロセスを明らかにしようとしています。あるいはどのような知識を与えることにより、より適切な行動が形成されるかについても扱います。近年では心情（感情）システムも扱うようになってきました。

参考：大山正・東洋（編）（1984）. 認知心理学講座：1. 認知と心理学 東京大学出版会

小谷津孝明（編）（1985）. 認知心理学講座：2. 記憶と知識 東京大学出版会

佐伯胖（編）（1982）. 認知心理学講座：3. 推論と理解 東京大学出版会

波多野誼余夫（編）（1982）. 認知心理学講座：4. 学習と発達 東京大学出版会

例えば、終助詞に関して、言語学的研究と認知心理学研究の違いを知ると学問の違いによって、対象へのアプローチの違いが分かります。その参考として以下があります。

伊東昌子（2010）. 文末詞「の」が記憶に与える影響：相互行為の観点から
認知科学, 17, 287-296.

1-1-4 教育心理学

教育の諸問題に心理学を応用しようとする研究領域です。主に乳児期から青年期にかけての人間の精神および知能の発達や人格形成などと教育の関係を上げます。また、教育や学習の諸現象を心理学的に明らかにし、効果的な教育方法を発見し、教育現場に役立てる領域です。

参考：篠ヶ谷圭太（2013）. 予習時の質問生成への介入および解答作成が授業理解に与える影響とそのプロセスの検討 教育心理学研究, 61, 351-361.

※ 成人に関しては、学校教育があてはまらないため、「熟達論」や「職場学習論」あるいは経営学領域における「人材育成論」を心理学的観点から研究する領域があります。

参考：伊東昌子（2007）. 高達成度プロジェクトマネージャーは組織の知とどう関わるか
組織科学, 41, 57-68.

1-1-5 発達心理学

人の加齢に伴う発達の变化を研究します。かつては乳幼児が大人になるまでの過程が研究の中心でしたが、現在では壮年期、老年期も含め、生涯を通じた変化や成長が対象になります。

参考：浜名真衣・針生悦子（2015）. 幼児期における感情後の意味範囲の発達の变化
発達心理学研究, 26, 46-55.

参考：長谷川真理（2014）. 信念の多様性についての子どもの理解：相対主義、寛容性、心の理論からの検討 発達心理学研究, 25, 345-355.

参考：田淵恵（2014）. 高齢者の利他的行動としての「語り」に与える世代間相互作用の影響：実験場面を用いた検討 発達心理学研究, 25, 251-259.

1-1-6 応用心理学

教育心理学も一つの応用領域と考えることができますが、他にも現実社会の問題に基礎心理学の理論や方法論を適用して原因の理解や解明、そして解決の設計を目指す多くの領域（産業分野、

医療分野，司法分野，防災分野，交通分野など）があり，理論的發展にも貢献します。

参考：菊野春雄 (2001). 目撃証言に関する心理学研究の可能性 法と心理, 1, 55-66.

参考：中西誠・多田昌裕・飯田克弘・蓮花一己・安時亨・山田憲浩 (2016). 高齢運転者の高速道路事故多発地点における安全確認とリスク認知特性の検討 交通心理学研究, 32, 1-17.

1-2 研究スタイル

第一領域における研究スタイルは，大きく分けて4種類あります。

1-2-1 理論検証型

研究者が焦点をあてる現象や事象に関する文献研究を行った上で，そこから当該現象や事象あるいはその内部プロセスについての理論を構築し，測定可能な操作仮説を立てて理論予測を行い，理論の検証を実験や調査によって行います。理論的な予測値と実測値を比較して，理論が検証できたかどうかに関する議論を展開します。

参考：外山美樹(2017). 楽観性が代替的な目標の抑制に及ぼす影響 教育心理学研究, 65(1), 1-11.

1-2-2 理論生成型

心理現象の背景にあるプロセスや構造あるいは法則を明らかにしようとする研究です。多くのデータを収集して特定の観点から分析して特定の項目間の関係性を明らかにすることにより，理論的なモデルを構築する場合と，少数の特徴的事例に焦点をあてて濃密な質的データを収集して分析し，新たな仮説を生み出そうとする研究です。

参考：高橋晃 (2017). 再認判断における新旧項目処理の独立性 心理学研究, 88, 21-31.

1-2-3 心理尺度開発型研究

人には様々なパーソナリティ特性，行動スタイル，学習スタイル，他の特性があります。それらの中で，まだ開発されていない個人特性を測定する尺度を開発し，その信頼性や妥当性を検討する研究です。

参考：芳賀道匡・高野慶輔・羽生和紀・坂本真士(2017). 大学生活における主観的ソーシャル・キャピタル尺度の開発 教育心理学研究, 65(1), 77-89.

1-2-4 実践研究

教育や社会における心理学的問題や学習の問題に対して，心理学の理論や方法をユニークに適用して実践活動を行い，効果を分析して結果を示し，その試みの意義を解説したものです。問題解決などの認知的問題に有効と考えられる他領域の手法を適用して，評価を行う場合もあり

ます。ただし、実践と結果を記述してまとめるにとどまる実践報告とは異なります。

参考：小野田良助・篠ヶ谷圭太 (2014). リアクションペーパーの記述の質を高める働きかけ—学生の記述に対する授業者応答の効果とその個人差の検討—教育心理学研究, 62, 115-128.

参考：伊東昌子 (2018). 実験心理学長期実習科目へのプロジェクトマネジメント手法の適用と有効性評価—常磐大学大学院論究, 第5号 (印刷中)

社会の中での実証実験は、インタビューなどの質的データによって効果や成果を評価します。その分析事例としては、以下がありますので、参考にしてください。データだけではなく、きちんと最初の実験するプログラムの影響をモデル化した上で、分析を行っています。情報通信領域、医療領域、心理学領域の複合領域の社会実証実験です。

藤村香央里・高橋誠治・中村亨・前田祐二・佐藤生馬・南部美砂子・藤野雄一・滝沢礼子・高橋肇・伊東昌子(2015). 家庭で測定したバイタルデータの共有による主体的ヘルスケアの実現, 日本遠隔医療学会誌, 11, 7-16.

1-3 研究に際しての思考の枠組と論文構成ならびに注意事項

以下の構成要素は論文執筆の指標であり、研究を進める上で準拠すべき枠組でもあります。

問題

- ・研究テーマ（何を明らかにするか）とその背景を述べる。
- ・研究テーマに関連する文献を研究して、従来研究の成果をまとめる。
- ・研究テーマに関連して、従来研究では答えが出ていない課題を述べ、その課題解決のためにどのようなアプローチを採用するか、あるいはどのような理論を構築するか、あるいは何を明らかにするかを述べる。それを研究の焦点とする。

(注意) 文献研究のとき、文献を一つ一つ参照し、まだこの点が確認検討されていないから確かめるとの素朴な議論に陥らないようにする。複数の文献を整理して、どのような取り組み方に大別できるか、それらは問題へのどのような見方に集約されるかを整理した上で、新たな取り組み方を説明するとともに、その意義、例えばどのような重要な側面が明らかになるかを丁寧に説明する。

- ・理論検証型の場合は、理論仮説を立てる。

目的

- ・実験あるいは調査の目的を明示する。

(注意) 目的を考えるとときに、特に独立変数となるものと問題で取り上げた研究の焦点との関係を十分に考慮すること。これもやっておこうという要因を思いついたとしても、それを独立変数として操作する意味を明確にしておくこと。(例、男女差を調べたいという場合、研究の焦点に関連して性別の何がどう影響すると考えられるかを明確にしておく。)

方法

実験の場合

- ・要因計画：独立変数と従属変数を明記する。
- ・参加者：年齢，性別，その他の関連する属性，人数，等を明記する。
- ・刺激材料：刺激材料を具体的に示す。従来研究の刺激を採用した場合は，その文献を示す。
- ・装置：装置の図，ソフトウェア，製造会社など，必要に応じて明記します。
- ・手続 詳細かつ明確に述べる。

調査の場合

- ・調査対象者：年齢，性別，その他の関連する属性，人数，回収率，等を明記する。
- ・調査年月日，場所，とその理由を述べる。
- ・調査方法（面接法，郵送法，等）を丁寧に記す。
- ・質問紙調査であれば調査票，半構造化面接調査であれば質問項目などを明記する。

結果

・結果の処理法

収集したデータをどのような方法で分析するかを説明する。

・従属変数に即した結果

従属変数の種類ごとに，結果を図あるいは表に記し，解説を書く。解説には3種類考えられる。結果の値そのものを記述して示す解説，統計解析の結果の解説，そして数値結果が目的に照らして何を意味するかについての解説である。基本的には，最後の意味は考察に書く。

- ・調査研究や実践研究に関し，データが言語報告などの質的データである場合は，分析方法を丁寧に解説する。グラウンデッドセオリーの適用の場合は，発見された概念の個数を算出して量的データとして扱うことも可能だが，質的データを直接的に解釈する場合は，その解釈と理論や想定モデルとの関係を丁寧に説明し，事例を示す。

考察

- ・実験あるいは調査の結果から明らかになったことを述べます。先に述べたように，目的に照らして議論する。
- ・検証されなかったことや予測と異なる結果を得た原因について説明をする。
- ・今回の実験あるいは調査から得られる示唆や意味を，研究の焦点あるいは研究テーマに照らして丁寧に議論する。このとき，新たに文献に当たる必要性が出てくる場合がある。
- ・今後の課題を述べる。

引用文献

日本心理学会による「執筆・投稿の手びき」に従って掲載する。

2. 第二領域 人間と社会・コミュニケーション

2-1 主な研究領域

第二領域は社会学や社会心理学を中心に、人間の心性と人間がつくる集団・組織の構造と機能、それを支えるコミュニケーションの特質を解明します。また法学、政治学、経営学などその他の社会科学における領域の研究も行います。

2-2 自分のテーマの研究をする前の心構え

自分の研究テーマに取りかかる前に、以下のことに注意してください。

2-2-1 自分の学問領域の基礎知識を身に着ける

前述のように第二領域は社会科学全般を含む幅広い領域です。だからこそ、その中で自分自身がどの学問分野の立場から研究をするのか明確にしておく必要があります（**コラム4参照**）。同じテーマであっても学問分野によって切り口や論じ方は異なります。もし自分の学問分野が不明確なまま関心のあるテーマを研究するとどう論文をまとめてよいかわからなくなってしまいます。まずは自分の学問分野を明確にし、その学問分野の基礎的な知識や方法論を身につけてください。研究指導教員に相談すればどのような文献を読むべきかのアドバイスをもらえるでしょう。自分の研究テーマとは一見関係なさそうな文献や論文を勧められることもあります。研究の進め方や分析の方法などたくさんのヒントがあるはずです。

2-2-2 「価値自由」を意識する

人間は誰しも自分自身の価値観を持っています。研究においても、「自分の研究テーマを選ぶ」ということ自体にすでに価値観が影響していますし、ある事実を探求する際も価値観を離れ完全に客観的に論じることは不可能です。特に第二領域が対象とする社会科学の場合はその傾向が顕著です。だからといって主観的にデータを集め、分析し、考察したのでは学術的研究とは言えません。そのようにしてまとめた文章は筆者の価値観を正当化するための意見文に過ぎず、学術的論文とは見なされないでしょう。社会科学の研究者は、「自分の価値観から逃れられないけれども、自分の価値観にとらわれない客観的な態度が求められる」という矛盾した状況に置かれるのです。

社会科学全体に大きな影響を与えた Max Weber はこの問題を「価値自由（自分の価値観から距離を置いた自由な態度）」として論じています。簡単に言うと、まず自分自身のよって立つ価値観がどんなものであるのかを自らが明確に自覚し、そのうえでそれに囚われない客観的な目で研究対象を認識し、データ収集や分析・解釈を行ったうえで、自分とは異なる価値観を持つ他者に対して認識させる、という手続きを経ることで客観性を（できるだけ）担保しよう、という方法です（詳しくは岩波文庫から出ている『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』を読んでみてください）。

価値自由を担保するのは大変難しい問題です（社会科学の永遠のテーマのひとつと言ってもいいかもしれません）。しかし自分の価値観にとって（あるいは自分が主張したい結論にとって）都

合のいい事例だけを集めて論じる、といった態度は避けなければなりません。「自分は〇〇だと思っている。しかし本当にそうなのか？」と自問自答し続ける態度が必要です。

2-2-3 自分の研究テーマの社会的意義について考える

「大学院での研究」は何らかの社会的意義のあるものでなければなりません（**コラム1参照**）。大学院での研究は教職員の指導・サポートはもちろん、大学院に対する国や自治体からの助成金、調査に協力してくださる方々、先人たちが積み上げてきた「学術研究に対する社会の信頼」など、様々な支えがあってはじめて可能となります。こうした様々な支援に応える責任が「大学院での研究」にはあります。これが「個人の趣味としての研究」とは異なる点です。

社会的意義とは、経済的利益を上げたり、ただちに社会を変革するものとは限りません。長い目で見ると社会に何らかの寄与をする研究もあるでしょう。大切なのは「そのテーマに興味があるから研究する」だけではなく、「そのテーマに何らかの社会的意義があるから研究する」という態度です。なかなか難しいことではありますが、自分の研究テーマがどんなかたちで社会に意義があるのかは、研究を続けていく限り常に問い続けなければならない課題です（**コラム6参照**）。

2-3 研究スタイル

第二領域の研究スタイルは多岐にわたりますが、ここでは第二領域の多くの学問分野に共通する、実証研究で用いられる研究スタイルを中心に説明します。

2-3-1 事例研究（意味解釈法）

事例研究は、分析対象とする事例の数が少なく、定性的に記述され、文献調査やインタビュー、フィールドワークなどを用いた過程追跡という方法で検証が行われる研究スタイルです。定性的研究とも呼ばれます。事例研究は多岐にわたりますが、理論検証型と理論構築型に大別されます。

理論検証型：

①ある理論（や仮説）がすでに提唱されている中で、その理論が最も典型的に当てはまる事例を分析することで、ある理論の正しさを実証する研究（典型的事例研究）と、②既存の理論に対し、それを覆すような事例を取り上げ、理論を反証する研究（逸脱事例研究）、③ある理論と一致すればその理論が強く支持され、そうでなければその理論が強く疑われる事例を取り上げることで理論を検証する研究（決定的事例研究）があります。④また十分に検証されていない理論がある場合、それが検証するだけの妥当性を備えたものかを予備的に検証する研究（妥当性調査）があります。

理論構築型：

⑤必ずしもあらかじめ理論や仮説が明示されておらず、理論構築を目指すその後の研究に役立つための研究（事実発見的な事例研究）と、⑥新たな因果関係に繋がるような発見を目指す研究（ヒューリスティック事例研究）があります。これらは次に述べる計量分析の予備調査として位置づけられることがあります。

事例研究を行う場合は、これら6つのタイプのどれに当てはまるかを意識しつつ研究を進める

必要があります。また事例研究は計量研究などに比べ「やりやすい」と誤解されることがありますが、しっかりとした調査技法を身につければ有意義な研究はできません（**コラム3参照**）。以下の本などを読んで技法の習得に努めてください。

- ・谷富夫・芦田徹郎編著『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房，2009年。
- ・谷富夫・山本勉編著『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房，2010年。

2-3-2 計量分析（統計帰納法）

計量分析は、ある社会現象に含まれる因果関係について推論することを目的とし、多数の事例に関する数値化されたデータを用いて統計分析を行う研究スタイルです。定量的研究とも呼ばれます。基本的には理論検証型の研究アプローチになります。計量分析は事例研究に比べ分析から得られた知見を一般化しやすいという利点がありますが、あくまで研究プロセスが「適切に」行われることが前提となる点に注意が必要です。計量分析を行うためには統計学に関する基礎的な知識が必要なほか、SPSSなどの統計ソフトの操作に習熟する必要があります。以下の本が参考になると思います。

- ・林拓也著『社会統計学入門』NHK出版，2012年。
- ・内藤統也監修・秋川卓也著『文系のためのSPSS超入門 新装版』プレアデス出版，2012年。

2-3-3 フォーマル・モデリング（数理演繹法）

フォーマル・モデリングは、行為者（アクター）の行動原理と意思決定状況を数理的に表現し、そこから予測される結果を演繹的に推論する研究アプローチです。計量分析とは異なり、理論あるいは仮説の導出を目的とする理論構築型の方法です。数式を使ったモデルを組み立てたり、コンピュータを使ったシミュレーションを行います。やや高度な数学的知識が必要となりますが、数学は普遍的で紛れのない論理から成り立っていますから、誰にとっても疑いようのない論理的な事実を明らかにできる点に魅力があります。詳しくは以下の本を参照してください。

- ・飯盛和夫編著『社会を数理で読み解く 不平等とジレンマの構造』有斐閣，2015年。
- ・河野勝・西條辰義編『社会科学の実験アプローチ』勁草書房，2007年。

2-3-4 実証研究以外の研究スタイル

以上のような実証研究のほかにも、第二領域には様々な研究スタイルがあります。ここでは参考となる文献を挙げるに留めますので、詳しくは研究指導教員に相談してください。

2-3-4-1 理論研究（法解釈学）

- ・梅田豊「取調べ受忍義務否定論の再構成—刑訴法一九八条一項但書の解釈についての一試論」『島大法学』第38巻第3号，1994年。

2-3-4-2 会話分析

- ・串田秀也・平本毅・林誠著『会話分析入門』勁草書房，2017年。

・高木智世・細田由利・森田笑著『会話分析の基礎』ひつじ書房，2016年。

2-4 研究に際しての注意事項

修士論文に向けた研究をするにあたって以下の点に注意してください。なおこの節の記述は主として実証研究を念頭に置いています。

2-4-1 研究目的

第二分野の研究の目的は「概念の検討・整理」「仮説検証」「仮説創設」「新事実の提示」などがあります。論文を書く場合、目的は1つだけを選ばなければなりません。複数の目的は十分に達成できないどころか、かえって中途半端になったり論文を混乱させることとなります。

①概念の検討・整理

先行研究によって使われてきた主要な概念（理論，思想，方法論など）が持つ様々な意味や含意に対し、これまで展開されてきた主張や当然視されてきた前提を整理することによって混乱や論争を解決することを目的とする研究です。

②仮説検証

先行研究や予備調査などですでに得られている仮説や解釈が正しいか否かを、事例研究や検証することを目的とする研究です。

③仮説創設

一般的仮説（一般的事象に関する解釈）や概念を、特定の事例やデータから導き出す、あるいは抽出することを目的とする研究です。

④新事実の提示

先行研究で取りあげられてこなかった新しい事実を、資料やデータに基づいて報告することを目的とする研究です。

2-4-2 中心命題（the central thesis）

論文は、論証したり証拠をあげるなどして「この中心命題は正しい」と読者を説得するためにあります。中心命題はいうなれば論文の背骨を構成するものであり、これがなければ論文は成り立ちません。言い換えれば中心命題を緻密にかつ説得力をもって展開する手段が論文です。

前述した「1つの論文には1つの目的」の原則と同様に、「1つの論文には1つの中心命題」の原則が当てはまります。

中心命題は必ず反論できるような性格を持っていなければなりません（反証可能性）。また一般的にいう中心命題は「SではなくてTである」という論理を内に含んでいます。例えば因果関係においては「Zの原因はXではなくYである」という立て方が中心命題として適切です。この中心命題に対する反論は「Zの原因はXである」「ZとYの間には因果関係がない」「Zの原因はXでもYでもない別のものである」などが考えられます。そしてY原因説を展開する論文の筆者は、これらの反論を踏まえたうえで中心命題を展開することになります。データの検証結果や証拠資料を提示して、なぜ「X原因説」や「Z-Y因果関係否定説」は説得力を持っていないのかを

論証していくことで、中心命題の完成度や説得力を高めていきます。

2-4-3 分析の枠組み（リサーチ・デザイン）

中心命題を論証する手段が分析の枠組み（リサーチ・デザイン）です。この枠組みは社会科学の諸分野によって様々ですが、概ね「1-3-1 研究目的」を達成するために最も適切な手法を「1-2 研究スタイル」で紹介したもののうちのいずれかを用いることとなります。どの分析手法を採用するにせよ、自分の所属する学問分野でよく使われる分析手法の習得が重要です。

分析枠組みの設定においては以下の項目をチェックする必要があります。

- ①使用される資料・データは何か？
- ②使用される分析手法は何か？
- ③検証される仮説（解釈）は明確か？
- ④仮説（解釈）の信憑性の信憑性を判断する基準は明確で正当か？
- ⑤分析手法の実施に際して技能的に問題がないか？

2-4-4 中心命題が持つ含意（implications）

論文は必ず「含意」が含まれていなければなりません。含意とはその論文の知見がその学問分野に、あるいは社会に与える貢献やインパクトを差します（前述した社会的意義を思い出してください）。言い換えれば何らかの含意を含まない論文は大学院生の書く論文としては認められません。この論文を書くことにどんな学問的・社会的意味があるのか、読者はこの論文を読むことでどんな学問的・社会的意味を得られるのかを常に意識しながら研究を進めてください。

参考文献（研究ガイドを執筆するにあたって参考にした文献。既出を除く）

- ・今田高俊編『社会学研究法・リアリティの捉え方』有斐閣アルマ，2000年
- ・川崎剛『社会科学系のための優秀論文作成術』勁草書房，2010年
- ・久米郁男『原因を推論する 政治分析方法論のすゝめ』有斐閣，2013年
- ・加藤淳子・境家史郎・山本健太郎編『政治学の方法』有斐閣アルマ，2014年

その他大学院生にぜひ読んでほしい文献

- ・高根正昭『創造の方法学』講談社現代新書，1979年

筆者自身がアメリカの大学院で学んだ経験を通じて社会科学の方法についてわかりやすく解説した名著です。内容はやや古いですが現在でも十分参考になります。

- ・伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会，2003年

「科学とは何か」を探求する学問である科学哲学の入門書です。ユニークなのは「科学」とされている学問（心理学，天文学，医学など）と「疑似科学」とされている営み（超能力研究，占星術，代替医療など）を対比させながら論じている点です。自分の研究が「学術的研究」として認められるためにはどんなことに気をつけるべきかを学ぶことができます。

3. 第三領域 臨床心理学

臨床心理学研究には大きく分けて、実験法、調査法、臨床法という3つの系譜があります。実験法と調査法は法則定立的研究であり、仮説検証・データの数量化・統計的分析・量的研究が重視されます。臨床法は個性記述的研究であり、仮説生成・物語の分析・質的研究が重視されます。

第三領域として臨床心理学の分野が独立していますが、研究の基本的なマナーなどは第一領域の基礎心理学と同様です。本冊子の第一領域の内容（特に、p.6～「1-2. 研究スタイル」及び、p.7～「1-3. 研究に際しての思考の枠組と論文構成ならびに注意事項」）をまずはじっくりと読み込んでください。

論文として文章を執筆していく段階になれば、日本心理学会による「執筆・投稿の手びき」を隅から隅までよく確認しながら書き進めていくこととなります（ただし、学会発表や論文の学会雑誌への投稿においては、それぞれの学会で独自の執筆ガイドを作成していますので、そちらを確認して下さい）。

第一領域で説明されている内容と一部表現の異なる用語も登場しますが、ここでは第三領域における特徴的な部分を強調して解説していきます。

3-1 研究スタイル

3-1-1 臨床法

個性記述的研究であり、仮説生成・物語の分析・質的研究が重視されます。

3-1-1-1 事例研究

特定の障害・疾患・疾病・問題をもつ事例の経過を報告し、事例の【個別性】に応じたマネジメントについて丁寧に検証していきます。注意したいのは、事例研究は事例の報告に留まらない、という点です。研究の切り口としては大きく分けると2つあります。まずは、クライアントのもつ特定の障害・疾患・疾病・問題に着目する視点、もう一つはそうした事例への支援方法にまつわる視点について着目するという切り口です。過去に行われた研究や報告を読み込み、そこから、他の事例にも役立つ視点【共通性】を見いだすことが求められます。

◎クライアントのもつ特定の障害・疾患・疾病・問題に着目する視点

参考) 水口 進 (2009). レット症候群の発達の世界について —新版 K 式発達検査における反応(行動)を手がかりとして— 常磐大学心理臨床センター紀要, 3, 39-47.

◎事例への支援方法にまつわる視点

参考) 富井 恵子・山科 満 (2017). 障害福祉領域における相談支援事業で認知行動療法的アプローチを行った2事例 心理臨床学研究, 34(6), 627-637.

3-1-1-2 一事例実験やアクションリサーチ

ある実験デザインを設計し、事例を継時的にアセスメントすることで定量的データを収集して科学的に研究します。第Ⅲ領域では心理臨床センターで大学院生が臨床心理士資格を保有する教員の指導の下、実際に応用行動分析に基づく学習支援プログラムに取り組んでいます。修士論文としては倫理的な問題があるため取り上げられることはありませんでしたが、修了後に指導教員と連名で研究発表をすることもあります。

参考) 菅佐原 洋・平林 知実 (2013). 発達障がい児に対するコンピュータを用いた漢字読み書き支援 常磐大学人間科学部紀要, 30(2), 143-154.

3-1-1-3 質的研究

臨床実践活動では、研究者が対象に積極的に働きかけて事態の改善を試みるため、研究者と対象を取り巻くコンテキストをも詳細に記述し、それらを含めて分析することが必要となります。質的研究というと、数量的に把握できない質的なところにじっくり迫れるというイメージから、臨床心理学領域の学生には魅力的に映る研究スタイルのようです。しかし、自らの主観をすべて捨て去ることなく、かといってその枠組みにとらわれるのではなく、客観的・科学的にデータを読み込んでいくためには、しっかりとした方法にのっとり、相当の時間をかけた分析を必要とします。本冊子の第二領域に関わるコラムですが、コラム3を熟読して下さい。

参考) 上倉 安代・齊藤 翔悟・佐藤 真理奈・野村 規雄・入軽井 悦子 (2016). 心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長 ——複線経路・等至性モデル (TEM) による分析—— 立正大学臨床心理学研究, 14, 41-54.

なお、以下の書籍は、臨床の実践と研究とを結びつける大切な視点がふんだんに記されているので、是非参考にして下さい。

参考) 福島 哲夫 (2016). 臨床現場で役立つ質的研究法 臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで 新曜社

3-1-2 調査法・実験法

法則定立的研究であり、仮説検証・データの数量化・統計的分析・量的研究が重視されます。

3-1-2-1 調査法

一群の対象から必要な情報を引き出す研究法です。実験的な操作・統制を加えないので、厳密には相関関係から推測された因果関係を探る研究となります。情報の引き出し方とし

では、検査法・観察法・面接法による方法が挙げられます。これらの方法は臨床心理学研究の分野では心理アセスメントに関係する研究として語られます。また、検査法にまつわる研究の視点として、検査方法を開発する（質問紙作成を含む）もの、開発された信頼性と妥当性の確認されている検査法を用いて必要な情報を引き出し、新たな知見を見出すものが挙げられます。

◎検査方法を開発する（質問紙作成を含む）研究

参考) 鈴木 久美子・小川 俊樹 (2001). 「情緒的巻き込まれ」に関する心理学的研究 I ——尺度の作成—— 筑波大学心理学研究, 23,237-245.

◎いわゆる調査研究（検査法）

参考) 笹川 果央理・中山 真孝・内田 由紀子・竹村 幸祐 (2017). メンタルヘルス不調による休職者の自己価値の随伴性 心理学研究, 88(5), 431-441.

3-1-2-2 実験法

病理の解明、通常の心理的機能の発見、臨床技術や理論に実証的根拠を与えることを目的とした研究など、対象者へ何らかの実験的な操作や統制を加えます。因果関係を捉えることができる研究スタイルです。病理の解明と通常の心理的機能の発見にまつわる研究では、事故や病気などの原因で後天的に障害をもつことになった者を対象者とすることで多くの知見を見出してきました。大学院生としては自分でそうした研究を行うことは難しいでしょうが、自分の研究を進めていく上では必要な知識になりますので、認知心理学や神経心理学などの分野の情報も理解できるよう学習を進めて下さい。

◎臨床技術や理論に実証的根拠を与えることを目的とした研究

参考) 馬場 久美子 (2016). 大学生を対象としたストレスマネジメント教育が感情状態に及ぼす効果について 常磐大学大学院学術論究, 3(3), 59 - 74.

◎病理の解明あるいは通常の心理的機能の発見にまつわる研究

参考) 増山 晃大・望月 聡 (2017). 順行性制御および反応性制御と抑うつ症状の関連 筑波大学心理学研究, 54, 109-115.

3-1-2-3 調査法と実験法の混合デザイン

同一の母集団の中から無作為に2群を設定し、一群にはなんらかの介入を行い(実験群)、他方の群(統制群)には行わずに調査します。介入は基本的に望ましい変化や改善を期待する内容のものであるため、他方の群(統制群)に不利益が無いよう、実験終了後に実験群に行われたものと同様の介入をすることを約束する手法(waiting list法)が代表的です。
参考) 中野 敬子 (1991). 対処行動と精神身体症状にける因果関係について 心理学研究, 61(6), 404-408.

3-2 臨床心理学研究における留意点

3-2-1 標本抽出の問題

例えば、不安障害のメカニズムについて研究することが倫理上難しい場合に、現在、不安障害の診断名はついていない、いわゆる、健常者のうちの高不安者を対象に調査や実験を行うことがあります。両者を連続線上にあるテーマと見なして良いのか、特殊な事情を勘案する必要があるのか、という議論が残ります。十分にそうした観点について吟味した上で、問題提起を行い、結果を考察していくという慎重な姿勢が求められます。

3-2-2 剰余変数のコントロールの難しさ

剰余変数に含まれるものとして、例えば、患者の知能・教育水準・罹患期間・処方薬の種類と量、症状などが挙げられます。ある診断名の確定した患者を対象としたとしても、剰余変数まで全てコントロールできる訳ではないことに注意が必要です。臨床心理学研究においては、伝統的な基礎研究のように、普遍的法則や一般的傾向を導くことや現象の要因統制にこだわり過ぎると臨床実践のリアルと乖離してしまうことがあります。

3-2-3 倫理的な配慮

対象者に不必要な負担や苦痛を与えてはならないこと、研究の目的を伝えて同意を得ることが必要不可欠ですが、どのような行為が負担や苦痛となるのか、どのように伝えることで同意を得られるのかなど、個々人の状態に応じて細心の注意が必要となります。また、個人情報保護や介入の適切性に関する検討にも熟慮を要します。

3-3 本章執筆に際して参考にした文献

森田 麻登 (2017). 臨床心理学における基礎研究と臨床研究の「橋渡し」を目指して ころの健康, 32(2), 22-25.

下山 晴彦・丹野 義彦 (2001). 講座 臨床心理学 2 臨床心理学研究 東京大学出版会

丹野 義彦 (2004). 臨床心理学全書第 5 巻 臨床心理学研究法 誠信書房

山本 力・鶴田 和美 (2001). 心理臨床家のための「事例研究」の進め方 北大路書房

第2部

ヒント&コラム特集

・

口頭発表時の注意とスケジューリングガイド

コラム1 知りたいこと、やってみたいことは、そのままでは研究には成り難い。

(どの領域にもあてはまることですよ。下記の事例をあなたの研究にあてはめてみましょう)

伊東昌子 (専門領域: 認知心理学, 認知工学, 人材開発論 (職場学習論))

例えば、心理学領域において、「空間の色とパーソナルスペース^{†1}の広さとの関係を知りたい」と思った学生がいたとします。

彼女は赤と青の布で覆ったパーティションで空間を囲み、パーソナルスペースを測定しました。その結果、赤で囲まれた空間でのパーソナルスペースの方が青のそれよりも広がったので、彼女はそう報告しました。果たしてこれは心理学的な研究と言えるでしょうか。一種の研究的活動ではあるとしても、心理学的研究であるとは言い難いと考えます。

心理学、特に第一領域においては、心(行動や反応)の仕組みやプロセスやその機能を、心理学研究法を用いて明らかにすることが大事です。例えば、従来研究から、赤は情動が活性化する、青は冷静になり落ち着かせることが明らかになっているとすれば、その精神状態からパーソナルスペースの広さに対して仮説を立てることができます。あるいは色の知覚に対する影響から仮説を立てることができるかもしれません。そのような仮説を立てた上で実験を行ない、その結果を色が知覚や判断に与える影響に関連させて意味づけるのであれば、それは心理学的研究でしょう。

このように知りたいこと、やってみたいことは、一旦、心理学の問題に変換する必要があります。「従来の研究で実施されていないから、あるいは知りたいから、それを知るために実験や調査を実施し、結果はこうなりました」ではなく、心理学領域の問題に位置づけて意味づけ、意義を説明し、結果をその意味や意義に関連づけて議論すると心理学的研究になります。

このコラムをより広く考えると、自分が知りたいことややってみたいことを、それが位置づけられる研究領域の研究として認められるためには、その領域の基盤的要件をきちんと“理解”し、“尊重”して取り組むことが必須であるということでしょう。独りよがりな研究活動にならないように注意しなければいけません。

(†1 パーソナルスペースとは、他人に近づかれると不快に感じる空間的距離のことで、対人距離とも呼ばれる。)

コラム2 勉強と研究の違い：院生に求められ期待される研究活動

伊東昌子（専門領域：認知心理学，認知工学，人材開発論（職場学習論））

大学院生の中には，大学院の授業科目を履修して専門的知識を得たり，自身の興味ある学術論文や書物を調べたり，関連する調査や実習を経験したりして，自身の中の専門的知識を蓄積し学ぶことが大学院生としての研究活動だと思っている人もいるでしょう。しかし，先人の成果である知識を吸収し与えられた場で経験を積むことだけでは，勉強の域を出ないと考えます。それでは研究とは何でしょうか。心理学者である浦上昌則氏はつぎのように述べています。

「歴史をよく知っているからといって，歴史研究者もしくは歴史学者とは呼ばないでしょう。・・・中略・・・もう一歩進んで，「でも，これまでの研究からはこのあたりが説明できないんだ」というところまで進んでいる人もいるでしょう。しかし，このような進捗では，まだ研究者とは呼べません。研究者と呼べるには，その自問に対して何とか答えを見つけて自答できることが必要になってきます。自分で答えを出せたことが，それを研究と呼ぶかどうかの，一つの境目になるでしょう。しかし，その答えを自分の中にとどめておいたのでは“研究した”とはいいいません。それは，外に向かって発信していないからです。・・・中略・・・“発見”をした先生が，それを本や論文にまとめ，世に問いはじめたら，それは研究をしている人と呼べると思います。ということは，院生がやらなければならないことは何でしょう。本を読んだり，論文を読んだりして，知識を増大させることだけではありません。調査や実験をして，新しい何かを発見することだけでもありません。それに加え，その何かを発表してはじめて，院生がやらなければならないことを実行したことになるのです。」

<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/~urakami/in.html> (2017年10月29日アクセス)

私も自分が探求した成果を学会誌に投稿し，査読の先生から丁寧な批評を頂き，そこで初めて人に伝わっていなかったとか，この研究の本当の価値は何だろうと再考し，自分の考えも表現も推敲して，やっと研究者らしい活動が一つできたと感じます。大学院生は当該領域の学会発表と論文執筆を目指しましょう。ぜひ，海外の学会あるいは国際学会で発表して下さい。まずはポスター発表でもいいですが，口頭発表に挑戦しましょう。口頭発表は厳しい査読を乗り越えなければなりません，達成感が高く，さまざまな反応を得ることができ，もちろん就職にも有利です。大学院生には，勉強を越えて研究活動をやり遂げてほしいものです。

コラム3 インタビューにご用心

砂金祐年（専門領域：政治学，行政学，公共政策論）

第二領域の院生の中には研究手法としてインタビューを選択する人が多い。無論，自分の研究テーマを明らかにするためにインタビューという手法が最適なのであれば問題はない。しかし中には他の調査手法を十分に検討せずに「とりあえずインタビューしてみる」という感覚の人もいる。中には「最も手軽な調査手法」と勘違いしてインタビューを選択する人すらいる。

断言するが，インタビューはあらゆる研究手法の中で最も難しい。量的手法は事前に統計学の基礎的知識や統計ソフトの操作などを学ぶ必要があるためかはじめから倦厭する人が多いが，実は基礎知識さえ身につけてしまえば，すでにあるフォーマットに自分の研究テーマを「当てはめて」いけば一応の研究成果として仕立てあげるのはさほど難しくない。一方で質的手法，特にインタビューは多分に職人芸的なところがあり，それを学術的に意義のある研究成果に仕立て上げるのは相当の習熟が必要なのである。とりわけ，質問をあらかじめ限定せずその場の会話の流れから知見を引き出していく非構造化インタビューはその傾向が顕著である。インタビュー調査において聞き手は透明人間ではなく，語り手は自動発話装置ではない。インタビューをすれば自動的に知見が得られると考えるのは大間違いだ。インタビューが豊かになるか貧しくなるかは聞き手と語り手双方のコミュニケーションのあり方に大きく左右される。聞き手と語り手が協働して意味のある知見を「作り上げていく」。それがインタビューという調査手法である。

まずは調査トピックに関連する先行研究や資料を十分に読み込んで「背景知」を得ておかなければ語り手との貧弱なやりとりしかできないだろう。また限られた時間で聞くことのできることはごくわずかに過ぎない。そのためにも質問は絞り込む必要があるし、「聞かなくてもわかること」を質問すると相手が詳しく話す意欲を減じてしまうこともある。十分に下調べして、「その人に聞かなければわからない」ことを絞り込んでおけば語り手からも信頼される。また語り手は聞き手が聞きたいことをなかなか話してくれないことも多い。そんな時に話の腰を折るのも厳禁だ。自然なコミュニケーションをしながら研究テーマに沿った情報を引き出すのは相当高度なテクニックが必要なのである。さらにインタビューが終わったら「テープ起こし」の作業が待っている。これは通常インタビュー時間の5倍くらいかかる苦行の時間だ。なのに大した情報が得られないと泣きたくなってくる。「あれも聞いておけばよかった」と思っても後の祭りである。聞き手にとっても語り手にとっても貴重な時間が無駄なものになってしまう。

インタビューは社会科学における主要な研究手法のひとつであるし，他の調査手法では得ることのできない豊かな知見を生み出すことも可能である。だからこそ「インタビューでもやるか」ではなく「インタビューしかない」という気概と覚悟を持ってインタビューに臨んでもらいたい。

コラム4 あなたは何学の研究者ですか？

砂金祐年（専門領域：政治学，行政学，公共政策論）

第二領域は社会科学のほとんどの分野が包含されている。そのため所属する大学院生の研究テーマも実に多種多様だ。それは第二領域の魅力でもあるのだが、一方でテーマがありきで学問的バックグラウンドが疎かになっている院生もいるように思われる。

研究テーマは言ってみれば食材であり、研究は調理に当たる。当然、同じ食材を用いても和食とフレンチと中華では調理法も違えば使用する器具も異なる。和食の修行もフレンチや中華の修業もしたことがない料理人もどきでは（趣味ならばともかく）お客に提供できる料理はできないだろう。研究も全く同様である。自分がどんな学問分野の研究をするのかが明確でないと、大学院生として認められる研究はできない。

例えば「女性の社会参加」をテーマに研究をしたいと思つたとしよう。ありがちなのは、CiNiiなどでキーワード検索してヒットした論文を集め、それをもって先行研究でござい、とするようなやり方だ。断言するが、この人は遠からず途方にくれることになる。

一口に「女性の社会参加」といっても、その切り口は様々だ。法学の立場から法制度の研究することもできるだろうし、政治学や行政学の立場から自治体ごとの政策の違いを比較することもできるだろう。社会学の立場なら制度が利用されない原因を家族関係の観点から探することもできるだろうし、男性の育児休暇が取得されない理由を企業風土の観点から分析すれば経営学の研究になるだろう。「CiNii 検索で途方にくれる」のはこうした学問分野の違いを認識せずに論文を集めたことによる。学問分野がバラバラの論文を集めてもそれらを自分の研究に活かすことは極めて困難だ。自分の寄って立つ学問分野に絞り込んで検索をかければ後で途方にくれなくて済むはずである。

自分のよって立つ学問分野をはっきりさせることのメリットはもう一つある。各学問分野にはそれぞれ固有の方法論があり、それに則ってなされた先行研究が無数にある。それらを参考にできるのだ。先行研究の方法論を自分の研究テーマに当てはめたり、既存の理論を自分の研究テーマの解釈に利用することは立派な研究行為である。言わば先人のレシピを参考に材料を変えて調理するようなもの。美味しい料理ができる確率もグッと上がること間違いない。先行研究を調べる際は、食材（研究テーマ）だけでなく料理の仕方（研究の方法）についても収集することが望ましい。そのためには自分の研究テーマ以外だけでなく、その学問分野の様々な先行研究にもあたる必要がある。

私は研究を料理に例えてみたが、I先生は学生に「研究は建築なんだ！」と言ったことがあるという。至言だ。たとえ建築材料（研究テーマ）を集めても、設計図を書き、土台を固め、基礎工事をしっかりして、きちんとした建築法に基づいて建てないと、風が吹けば崩壊する程度の家（研究もどき）しか建てられないだろう。そして当然、和風建築と西洋建築では建築方法は異なるはずである。院生の皆さんにはしっかりと学問的基礎を身につけ、どんな強風（メンターの突っ込みなど）が吹いてもびくともしない立派な家を建ててほしい。

コラム5 「将来、現場の臨床心理士になる自分に学術的な研究スキルは必要なのですか？」

馬場久美子（専門領域：臨床心理学・家族心理学・異常心理学）

はい。多いに必要です。専門家として現場でクライアント（患者や現場の他職種専門家）に貢献するためには、まずはその分野の新古の専門的知識を知っていることが必要です。自分に理解できる文献だけを読み、理解が難しい文献を避けてしまうようでは十分ではありません。自らが研究において先行文献を調べたプロセスが役に立つことでしょう。

そして、得られる知識は様々なものがありますが、どの知識を今、目の前のクライアントに活用すべきか、現状を総合的に分析する視点が欠かせません。そのような視点は現場では他者が手取り足取り教えてくれるものではありませんし、マニュアルのようなものがある訳でもありません。知識がデータだとすると、クライアントのニーズと現状を主要なファクターとして分析的に思考して判断を下すことになります。研究では結果の分析に相当するプロセスと言えるかもしれません。

最後に、得られた結果を考察して文章であったり口頭でフィードバックする（報告する）ことになりますが、クライアントのニーズと現状を念頭におきながら、相手に伝えることを意識することになります。これは、研究発表会や論文をまとめる作業と平行であると言えるでしょう。

コラム6 「自分の経験から研究のテーマを思いつきましたが、なかなかちょうど良い先行研究が見つかりません」

馬場久美子（専門領域：臨床心理学・家族心理学・異常心理学）

自分の経験から問題意識を持つこと自体は悪いことではありませんが、そういった場合、気をつけて欲しいことがあります。それは、自分の過去経験に囚われて視野が狭くなってしまいかねない、ということです。自分とその経験との心的距離にもよりますが、思い入れがとて強かったり、今も未解決で現在進行形で取り組んでいる問題であったりすると、なかなか客観的には物事を考えにくくなり、研究が思うように進まないという事態に陥りがちです。では、個人的な興味関心を出発点としつつも、そこに留まらず、社会的に意義ある研究として高めるにはどうしたらよいのでしょうか。

その第一歩として、まずは一旦自分の経験をそっと脇に置き、そのテーマ周辺のキーワードを手がかりにして、自分の問題意識が世の中でどういった言葉で語られてきた事象なのかをとことん調べてみましょう。

調べるのは専門的な研究論文は勿論ですが、分野によっては一般的な書物や映画といったこともあり得ます。調べることで自分の経験からくる問題意識には一応の答えが見つかり、調べたことの中から別の問題意識が芽生えるということがあるかもしれません。こういった作業はできるだけ早い段階（M1の春semester前半）でじっくりと行うことをお勧めします。

口頭発表、プレゼンテーションのガイド、注意

口頭発表やプレゼンテーションを行う時には、下記に注意してよく練習することが大事です。

1. 発表スライドは28サイズ位のフォントを使用し、見やすく作成する。
2. 発表に際しての文書資料をスライドにコピー、ペーストするのではなく、例えば表や図や箇条書きにして、見やすく視覚的にスライドを作成する。
3. フロアの先生方や大学院生に、自分が話しているスライド箇所が分かるようにポインターを適切に使用する。
4. 口頭発表時には資料を見ない。スライドやフロアの聴衆を見ながら、フロアに身体を向けて声をはっきりと出すように練習すること。資料を棒読みすることをしてはいけない。
5. 練習として、教員あるいは大学院生に聞いてもらう。
6. 発表時間内に必ず終わるように確認しながら練習し、質疑応答の時間を確保すること。
発表にとって大事なことは、聴衆に研究を伝え発信し、聴衆から質問やコメントを頂くことです。それが、研究を一步も二歩も進めることとなります。持ち時間一杯、研究内容を話し続けることはやってはいけません。それは質問つまりコミュニケーションや議論を遮る行為でもあるからです。

発表までの推奨タイムスケジュール

5週間前

- | ○発表資料の案を作成し完成させる。
- | ○指導教員に連絡を取り，指導に関するお願いを行う。教員のご都合を伺い予約する。

↓

4週間前

- | ○発表の筋を組み立て，スライド作成に取り掛かる。教員のコメントも参考にして，焦点を絞って組み立てる。特に，今回の発表は研究のどこまでを聴衆に聞いてもらうか，どういう独自性（あるいは方法，あるいは結果）を訴えるかを自分で検討し，スライドに反映させる。
- | ○先輩や指導教員に発表練習を聴いてもらえるかを打診する。先方のご都合を伺い予約する。

↓

3週間前

- | ○リハーサル時に評価してほしいポイントを記した評価シートを作成する。例，「発表の構成」「スライドのデザインや表現」「話し方」「質疑応答への態度」「その他」などの項目。
- | ○教員と先輩を聴衆にしてリハーサルを行う。時間を計測してもらう。
- | ○評価シートにフィードバックを書いてもらう。
- | ○改訂版を聴いてもらえるように，教員や先輩に予約をとる。
- | ○スライドを改善する。

↓

2週間前から1週間前

- | ○2度目のリハーサルをして，フィードバックをもらう。
- | ○スライドを改善し，電子データのバックアップを用意しておく。

↓

3日前から2日前

- | ○聴衆を前にしている姿勢で練習をする。聴衆を見て，熱意が伝わるように，研究の独自性，面白さ，意義などを伝わるように，練習をする。

↓

当日

- 会場を見て，その広さや聴衆への訴え方などを見積もる。
- 聴衆を見て，自信をもって発表する。
- 質問やコメント：配布された資料をしっかりと読み，発表をしっかりと聴かなければ，適切な質問はできない。したがって，質問には感謝をして，誠意をもって答える。
「ご質問ありがとうございます。それは～です。」
「ご質問ありがとうございます。その点に関しては，今後検討する予定です。」 など。

コラム執筆者



伊東昌子（第一領域）



砂金祐年（第二領域）



馬場久美子（第三領域）

常磐大学大学院 人間科学研究科
FD委員会 研究活動ガイドWG
2018年吉日